

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520716

研究課題名（和文） 明版書誌の解明を通じた明代出版史研究

研究課題名（英文） A Study of the Publication History in the Ming Dynasty by elucidating of Ming Books Bibliography

研究代表者

井上 進 (INOUE Susumu)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：40168448

研究成果の概要（和文）：

本研究の根幹をなす明版書誌の調査と収集については、明代前期刊本を中心に台湾蔵本 180部ならず、日本蔵本約 300部、つごう 480部ほどの原本閲覧と書誌収集を果たし、これにより従前からの蓄積と併せ、累計で 2900部たらずの書誌収集を達成した。またこの書誌の目録化については、新たに 300部たらずの整理を終え、累計で約 1000部の目録稿を準備した。さらにこうした書誌研究を通じた出版史の研究成果は、著書『明清学術変遷史』などを通じて公表した。

研究成果の概要（英文）：

This study is based on researching the Chinese books printed in the Ming dynasty and collecting their bibliography. I researched almost 480 original texts and collected their bibliography. They consists of 180 texts are owned in Taiwan and 300 are owned in Japan. The greater part of them was printed before the middle Ming period. Therefore, my total collection has reached nearly 2,900 items, including I have collected from I started this study. Among them, I sorted and catalogued about 300 items by addition, so all the number of catalogued items came to about 1,000. Furthermore, I published “*A History of the Transition of Scholarship in Ming-Qing Period*” and some monographs, to release my achievement of this study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：中国近世文化史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：明版、明代出版史、目録学、書誌学

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

## 1. 研究開始当初の背景

明代出版史の研究は、戦後より明代史研究一般がすこぶる活発となり、大きな成果を挙げた中でも、依然として低調で、今に至るも立ち遅れた状態をなかなか脱却できないままでいる。もとより個別善本についての版本研究や、戦前からの伝統を有する戯曲、小説書に関する書誌研究、あるいは徽州版画など出版史上のトピックに関する研究には、それぞれ相当に見るべき成果があるし、また近年、主として中国大陸の比較的若い世代の研究者により、明代の出版文化や書物をめぐる諸事情に関する研究も、追々さかんに行なわれるようになってきてはいる。

だが明代の出版全体はおろか、各時期、各地域の出版、あるいはある特定の出版者などにつき、その具体像を十分な史料的裏づけをもって描き出した研究は、遺憾ながらまだほとんど存在しない、と言ってよいだろう。近年の中国における研究にしても、彼の地における現在の条件からして、ある程度はやむを得ないことながら、その叙述の史料的根拠は目録、既存の研究書、論文等であることが多く、自ら行なった書誌調査による新知見というのは、ごく僅かしかないのが通例である。つまりそれらの研究は、史料的基礎の面で新たな発明が少ないうえに、現物を見るという、書誌学における基本をないがしろにしたものでもあり、よってその叙述もおおむね平板な、かつ事実関係の誤りや不足が往々にして目立つ結果となっている。

研究の現状がこのようであることについては、さまざまな事情が考えられようが、上述の中国における研究情況が端的に示しているように、そのもっとも直接的な、そしておそらく最大の原因は、研究の基礎である具

体的書誌の蓄積が、今なおきわめて不十分である、という事実であるだろう。旧時の伝統的版本・目録学の関心は、宋元の古版など貴重な善本に集中し、個別の善本はともかく、明版一般に対してはすこぶる冷淡な態度を取っていたし、この態度はその後の研究にもすこぶる大きな影響を及ぼしていた。

むろん近年に至れば、明版書の文物的価値が上昇し、これまで普通本として扱われてきたものもひろく善本化したことに伴い、書誌の調査とその結果の公表も、おいおい進んできてはいる。たとえば王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、1983）、国立中央図書館『国立中央図書館善本序跋集録』（同館・現国家図書館、1992～94）、台北・国家図書館『国家図書館善本書志初稿』（同館、1996～2000）、沈津『美国哈佛大学燕京图书馆中文善本書志』（上海辞書出版社、1999、増補改訂版、广西師範大学出版社、2011）などは、その著録対象の多くが明版であるし、また中国において国家事業として編纂された『中国古籍善本書目』（同書編纂委員会、上海古籍出版社、1985～96）も、それが大陸に現存する明版書のほとんどを網羅しているだけに、明版書誌研究にとって大きな参考価値を有している。

しかしながらこれら中国人による研究は、すべて中国大陸、台湾、米国の蔵書を対象としたものであり、明版書に関して言えば質、量ともに極めて優れるわが国の蔵書については、まとまった研究がまったく存在していない。じっさいわが国に現存する明版書には、他の国に伝わっていないものもはなはだ多く、明代出版史の全体像を解明しようという場合、その書誌調査はまさに不可欠なのである。これは明代出版史研究の史料的基礎にお

ける重大な空白と言わねばならず、かつこの空白を埋める責めは、当然のことながらわが国の研究者が負うべきであろう。

## 2. 研究の目的

上記のような背景の下で、報告者は本研究開始以前、すでに約 2400 部の明版書誌を蓄積し、またこの書誌資料を最大限利用しつつ、『中国出版文化史』（名古屋大学出版会、2002）や『書林の眺望』（平凡社、2006）等の単行本や論文を発表し、明代出版史の全体像を記述するための準備を整えていた。本研究はこの成果を継承し、さらに発展させようとしたものにほかならず、四年の研究期間内に達成すべき具体的な課題は下記のとおりであった。

まずは毎年 100 部以上の明版書を実査し、累計で 3000 部に近い量の書誌資料を蓄積すると同時に、その知見目録化をはかること。これはすでに述べた明版書誌研究の空白を埋めることを目指すものであり、また本研究後も引きつづきなされるであろう明代出版史の研究に、堅実な史料的基础を与えるための作業でもある。

なおこの近 3000 部という数字であるが、これまでの書誌研究においてもっとも多く明版書を著録している王重民『提要』の著録数が約 2400 部、しかもこれには同版を重複して著録している場合を含んでおり、版種で言うならこの数字はもう少し小さなものとなる。つまり近 3000 部というのは、従来の書誌研究書の水準をはるかに越えるものである。また王氏『提要』は序跋などの文字を載せないが、本研究が目指す知見目録は、主要な序跋などを摘録、場合によっては全録し、その史料的价值を高めるようつとめる。

ついでは書誌調査によって得られた新しい知見を用い、出版史上の個別の問題につき、

たしかな史料的基础をもつ論文や札記を著すこと。さらにこれを旧作と併せ、また訂補を加えたうえで、學術史に関する著書の一部にまとめて公刊することを図る。新旧の論文等を學術史の一部とするのは、出版を通じて學術の変遷を考える、という基本線で諸篇を整理するからであるが、そうして整理された諸篇は、むろん最終的に著されるべき明代出版史を準備するものでもある。

## 3. 研究の方法

本研究の根幹をなすものは、何よりもまず書誌調査であり、そこに格別複雑な方法論といったものは存在しない。すなわち各地の蔵書機関に赴き、未見明版書の閲覧、書誌収集につとめる、ということに尽きるわけである。しかし全体としては膨大な量になる明版書が、各地に分散して所蔵され、しかも研究の基礎として約 2400 部の書誌がすでに蓄積されている状態で、ただやみくもに調査を進めるといったことはむろんありえない。つまり得られる史料群が散漫で密度が低く、系統性に乏しいものとならぬよう、調査に際しては注意深い選択を加えることが必要になるわけである。

もっとも正徳以前の明代前半期刊本については、その現存数が後半期刊本と比較して格段に少なくなるため、あるものはすべて見る、という姿勢で臨むことが必要となってくる。しかも国内にのこっている未見の明代前期刊本は、版種で言えばもはやさしたる数でなく、よって本研究では台湾の国家図書館、および故宮博物院蔵本についても積極的に調査を行ない、明代前半期刊本書誌の「全体像」把握に近づくことを目指す。台湾での調査を行なうことにより、日本には現存しない明刊本の書誌をも収集することは、得られる書誌の全体性ないし系統性にとってはなは

だ有益であるだろう。

なお本研究における書誌調査では、一年当たり 100 部以上を実査するとしたが、この数字は以前に行っていた調査における実績よりかなり少ないものである。これは台湾における閲覧が、日本よりかなりきびしい制限の下でなされること、また国内の蔵本についても、未見の版種にはより厳格な閲覧制限のあることが少なくないからである。

収集された書誌の知見目録化については、すでに言及したように序跋などを摘録、場合によっては全録するうえ、版本系統や刊行事情、あるいは伝来などについての考証も含むもので、当然その作業量はきわめて大きなものとならざるを得ない。よって本研究期間にそのすべてを完成させることは不可能であるが、それほど遠くない将来に目録の完成と公開を果たすため、少なくとも累計で 1000 部程度の整理と目録入力稿作成は終えるものとする。

#### 4. 研究成果

本研究によって新たに調査され、その書誌が収集された明刊本は 480 部、すなわち平均して一年当たり 120 部であり、累計では 2900 部たらずの書誌が蓄積された。一年当たり 100 部以上の方は達成したものの、累計では近 3000 部というのが当初の目標であったから、これには届かなかったとなる。ただし結果としてこうなったのは、調査対象の大半が伝本の少ない、ないしは孤本でさえある明代前期刊本であったことから、書誌の記録には特に念を入れ、時間をかけたことが影響したため、調査そのものの進行に大きな遅れが生じたためではない。

じっさいこの四年の調査により、日本に現存する正徳以前刊行の明代前半期刊本については、少なくとも過半数の版種は実見した

であろうし、敢えて大まかな推定をすれば、七割以上の版種はすでに著録をすませたのではないかと思われる。また嘉靖以後刊行の明代後半期刊本についても、調査対象を刊行者の明確な官刻、坊刻本、また文化史、学術史的に相当の意味が認められる著作、あるいは版刻、印刷などに特徴のある本に絞ったことで、相当密度の濃い、系統的な出版史史料が得られたと自負している。

さらに台湾蔵本については、年二回、一回実質四日、ないし四日半の調査を行ない、すべて 180 部を実見したが、その大半は日本に伝本のない明代前半期刊本であるし、これ以外のものもやはり日本には伝本なく、かつ出版史上の史料価値が大きいものばかりを選択しており、その内容ないし質ははなはだ優れている。

ならば収集された書誌の知見目録化はここまで進展したかと言うと、整理、考証を加えたうえで目録稿とし、その入力までをすませたのが 300 点、累計では 1000 点となり、当初の目標の最低線はなんとか達成した。この知見目録が完成し、ひろく学界一般に公開されれば、それは本報告「背景」の項で言った、「明代出版史研究の史料的基础における重大な空白」を相当程度に埋める、この分野の研究にとっての大きな貢献となろう。ただしこの目録化を完成するには、必要となる作業量が膨大であるため、なお相当の時日を必要とするのではある。率直に言ってこの作業量の多さ、複雑さは、当初の予想をはるかに越えるものであった。ただし困難は大きくとも、現段階ですでに 1000 点の目録化を成しとげたことは、目録の完成のため堅実な基礎を形成し、今後の展開に確実性を与えたと言えるだろう。

著書、論文の形を取った出版史研究の方面では、『明清学術変遷史』（平凡社、2011）の

公刊がもっとも大きな成果である。本書は全体を通じて本研究の成果を十分に利用しているのだが、特にその前半部、第一部の六章は、出版を通じて明代における学術の変遷を跡づけたもので、本研究において得られた知見を直接に盛り込んでいる。したがってこの書の第一部は、明代における出版の全体像を把握、記述するための出発点と言ってもよく、やがては『明代出版史』に発展すべきものである。

さらに本研究の成果としては、中国、台湾、韓国の学界と交流し、お互いの研究情況につき理解を深めたことを挙げることができ、特に台北・故宮博物院の図書文献処と継続的な連絡、協力関係を築き、今もこれを維持していることは特筆してよかろう。中国および韓国の学界との交流というのは、北京大学歴史系からの要請に応え、その『北大史学』に論文を掲載したこと、またソウル大学奎章閣における学会に招待され、そこでの講演を報告集に掲載したことがこれで、後者については奎章閣より改めてその機関誌に掲載するよう要請があったのだが、すでに日本での発表を約束した後であったため、遺憾ながら断らざるを得なかった。

さらに台北・故宮博物院の図書文献処との交流では、当局の要請によって講演を行なったほか、さらに論文を『故宮文物月刊』に掲載したが、このことは台湾の研究機関、研究者との信頼関係を表現しているという点から言って、発表の事実それ自体がひとつの研究成果であった。なお故宮当局からは引きつづき論文の執筆等を依頼されており、これにはできるだけ積極的に答えていくつもりである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 井上 進 「元版与明初百年刊本的連続性— 従版本審定説起」(『故宮文物月刊』357、査読有、2012、p.110—119)
- ② 井上 進 「台北に書を訪うの記」(『颯風』51、査読無、2012、p.9—34)
- ③ 井上 進 「版本探求の意味、面白さ」(『斯道文庫論集』46、査読有、2012、p.23—29)
- ④ 井上 進 「明代活版考」(『名古屋大学東洋史研究報告』34、査読有、2010、p.29—48)
- ⑤ 井上 進 「論明代前期出版の変遷与学術」(『北大史学』14、査読有、2009、p.1—17)
- ⑥ 井上 進 「旧書筆記(十)」(『颯風』46、査読無、2009、p.1—20)

[学会発表] (計3件)

- ① 井上 進 「従趙体黒口到“活字銅板”— 談明代前期出版的歷程」、故宮博物院(台北) 專題演講、2011年12月20日、故宮博物院(台北) 図書文献大樓
- ② 井上 進 「版本探求の意味、面白さ」、慶應大学斯道文庫五十周年記念シンポジウム、2010年12月4日、慶應義塾大学
- ③ 井上 進 「明代活字本小考」、第二回奎章閣国際韓国学シンポジウム、2009年8月28日、ソウル大学

[図書] (計1件)

- ① 井上 進 『明清学術変遷史 — 出版と伝統学術の臨界点』(平凡社、2011、536頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 進 (INOUE Susumu)  
名古屋大学・文学研究科・教授  
研究者番号：40168448

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし